

# 13 複 式 教 育

## 複式教育プロジェクト

### 1. 複式学級の特性

複式学級の構成上の特性は、「少人数の学級構成」「異学年集団による構成」にある。異学年集団で構成されているということは、同学年児童構成の単式学級と比べ、「より人間社会に近い集団」といえる。また、少人数であるため、家庭的で強く結び付いた児童の人間関係が望まれる。

これまでの複式指導は、少人数であるが故の不合理な人間関係の生じやすさや学習指導上の困難点や学習時における児童の発想の乏しさなど、ややもすると単式指導に比べ、その特性をデメリットととらえ、いかに解消していくかに重点を置きがちであった。しかし、そもそも単式学級と同じように指導していくことに無理があるのである。複式学級指導においては、単式学級指導にとらわれないで複式少人数学級の特性を生かした指導を工夫していくことが大切である。

### 2. 個が生きる複式教育とは

個が生きる複式教育とは、上で述べたように複式学級の特性をよさとして生かし、子供達一人一人が学校生活を生き生きと送り、よりよい学校生活を求めて自分自身を高めていくことのできる教育といえる。

複式少人数学級の特性を生かすことにより次のようなことを期待している。

#### ① 確かな個の育成（自己教育力の育成）

少人数であるため、一人一人に目が行き届く。また、学習や、係活動などにおいて一人一人の活動が十分に保障される。例えば、全員の発表の場を保障しようとする時、単式学級では人数や時間の関係でできないこともある。しかし、複式学級では、全員の発表の場が保障され、自分なりの表現を十分にすることができる。また、一人一人に目が向き、じっくり互いの表現を見聞きすることができる。従って確かな学力や能力を育成することができる。

また、間接指導中は教師の目が一人一人から離れる場となる。その場を自分なりの考えや発想を十分に練る時間としてとらえると、自分なりの考えや表現を豊かにしていく貴重な場となる。さらに、間接指導に児童が相互に自分の考えを表現し合う場を設定していくと、児童がその間、自分達だけで活動を進めていくことになり、主体的な学習態度の育成が望まれる。

#### ② 豊かな人間形成（自他を思いやる態度の育成）

児童は、下学年時代と上学年時代を交互に経験する。即ち、2学年のサイクルで兄弟姉妹の立場を交互に経験しながら成長していく。上学年は下学年の良きリーダーとして手本となり、下学年は上学年のよき協力者として学びとっていく中で、異なった立場の人間を思いやる態度が身に付いていく。また、6か年同じメンバー構成であるがために、子供達は、成長と共に相互に長所も短所も理解し合っていく。このような豊かな人間関係の中で、自他を思いやる態度の育成が望まれる。

### 3. 自己を高める評価力の育成

このような複式教育を実現していくためには、子供達が、主体的に、複式学級のよさに気づき、よりよい学校生活を求めて活動に取り組み、その活動を振り返りながら自己を高めていこうとする力を身に付ける必要がある。そのような力を「自己を高める評価力」ととらえる。

このような自己を高める評価力を育成し、個が生きる複式教育を実現していくために、次の2点に視点をあてて研究を実践していく。

- ① 複式学級のよさを生かしていこうとする関心・意欲・態度の育成
- ② 複式特性を生かしたよりよき授業構成のあり方

#### 4. 実践の具体化

##### (1) 複式学級のよさを生かしていこうとする関心・意欲・態度の育成

複式学級相互，単式学級，養護学級との交流の場を通して，複式学級のよさを生かしていこうとする関心・意欲・態度の育成を図る。その際，次の3点を重点的に取り組んでいく。

###### ① 複式学級の特性を生かしていけるような交流計画を創造していく。

###### ア 学級での異学年との交流の場

学級での諸活動（例えば，係活動や話し合い等）を共に進めていくことを通して，下学年は上学年から将来あるべきよりよい自分達の姿を学びとり，上学年は，学級生活を向上していくためのよきリーダーとしての力を要求され，また，発揮していくこととなる。

###### イ 複式学級同士（低・中・高学年）の交流の場

複式高学年の子供達を中心となって計画実施し，楽しく交流しよりよい人間関係を培っていく場とする。本校で実施している集会の1つに，複式低学年が生活科で育てたさつまいもでの会食会がある。とれたさつまいもをどのように調理して食べるかを各グループごとに高学年の児童を中心に話し合う。図書室から本を借りて調べたり，家庭科の先生に聞きにいたり，家庭で親から聞いてきたりするなど様々な活動が見られる。庖丁の使い方や火を使った調理など初めて経験する低・中学年の児童。今までの経験を生かして下級生を手とり足とり教える高学年。お兄さんお姉さんぶりを発揮して下学年に教える上学年。このような教えつ教えられつのふれあいを通して，児童一人一人に，より学級や学校そして自分の生活を高めていこうとする関心・意欲・態度を身につけていくことができるのである。

###### ウ 単式学級との交流の場

各種行事，集会活動，給食交流会等を通して，単式学級のよさを取り入れたり，大勢の集団の中でも物おじせず自己を表現できる力を養ったりする。また，単式学級との交流を通して，複式学級のよさを再確認させる。

###### エ 養護学級との交流の場

お月見会，餅つき大会の集会行事，運動会での合同種目を通してより豊かな人間形成を図っていく。

###### ② 肯定的な教師の評価を通して複式学級のよさに気づかせる。

活動を通して，児童の様々な思いを把握し，受け止め，支援する。そして，一人一人の子供達に複式学級のよさに気づかせ，充実感を味わわせられるよう，肯定的な教師の評価を実施していく。

###### ③ 自己評価活動を活動の過程に位置づける。

児童が主体的に活動に取り組みその活動を振り返る場を適宜設定し，活動の取り組みの足跡を記録に残させ，次の活動に生かしていくようにさせる。

##### (2) 複式特性を生かしたよりよき授業構成のあり方

###### ① 異単元内容指導（国，社，算，理，図，家）

間接指導が，児童の学習が細切れる的な学習になったり，ワークシートによる自習になるようでは，複式特性を生かした指導とはいえない。児童自身が主体的に問題解決的な学習：「めあて意識を持つ」→「自力解決（解決の計画と実行）」→「集団解決（解決の検討）」→「解決の振り返りと新たなめあての設定」を進めることができるように学習活動を構成する必要がある。そのために直接指導のあり方，間接指導のあり方を見直し工夫していく。

###### ② 同単元（同題材）同内容（音，体，生，道，特）

学習内容の吟味と配列の工夫、発問の内容や方法の工夫、個々の発想を引き出し合えるようなグループづくりなど学年差、能力差を生かした指導の工夫をする。

### ③ 自己評価活動の学習過程への位置づけと評価内容と評価基準の明確化

## 5. 指導の実際と考察

ここでは、視点①の複式学級のよさを生かしていこうとする関心・意欲・態度の育成についての実際の指導について述べてくことにし、視点②については教科（国語、算数、生活）の所で詳述していくことにする。

### (1) 複式いもパーティ

複式低学年では、生活科の学習として、春にさつまいもを植えている。そして、秋にそのさつまいもを収穫する活動をとおして、植物への親しみや大切にしようとする態度を養おうとしている。その学習との関連を図って設定されたものである。

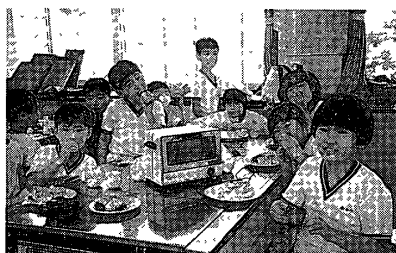
生活科の学習では、さつまいもを収穫したあとで、その芋を自分たちの暮らしにどのように生かしていくか話し合う場面がある。その中で、児童は食べたいという希望を強く持っていたが、実際には、どのようにして食べてよいかわからない状態であった。そこで、複式学級の特性を生かして、上級生、特に複式高学年の5・6年生に相談し、お礼としてみんなで芋を食べるパーティを開くことになった。

#### ① パーティまでの動き

- 1 複式低学年の児童が複式高学年の児童に芋の料理方法の相談とパーティを開きたい趣旨を伝えに行く。
- 2 複式高学年で、話し合いがもたれ、いもパーティの内容やプログラムの案が決定する。  
複式高学年では、さつまいもの料理方法について各自が家庭科の学習やクッキングブックを参考にして検討する。
- 3 いもパーティについての、複式低、中、高学年合同の話し合いが持たれ、いもパーティを合同で開くこと、いもパーティの内容、プログラム、料理をつくる低・中・高学年の縦割りグループが決定する。
- 4 芋の料理方法について、グループごとに話し合い、準備物を確認する。高学年の児童が中心となったが、あらかじめ調べてきた料理方法をプリントして配布したり、クッキングブックを持ち寄って説明するなど高学年児童が活躍していた。

#### ② いもパーティの当日

- A パーティの主な流れ
  - 1 はじめの言葉
  - 2 芋を料理する。
  - 3 つくった料理の紹介
  - 4 会食
  - 5 低・中・高学年ごとの出し物
  - 6 つくったものの感想発表
  - 7 先生からの話
  - 8 終わりの言葉
  - 9 片付け
  - イ 実際



児童は、事前に十分話し合いを行っていたため、当日はスムーズな流れの中で活動を行っていた。料理方法は、「鍋で煮る、ふかす」「フライパンで、焼く」「枯葉で焼芋にする」の3つに大きく分

かれ、グループごとに特色のある料理を行っていた。また、料理の過程では、庖丁の使い方や茶巾絞りの絞り方など高学年が下級生に丁寧に教えるなどの姿がみられた。

会食や出し物の発表では、共に作り上げたといった満足感がみられ、作り方などが話題になっていた。そして、みんな楽しくおいしそうに会食していた。

## (2) 複式豆まき会

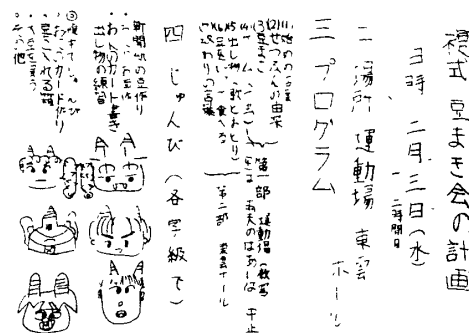
複中の子供達は、学級の中では、4年生を中心として、集会活動を運営する経験をしている。しかし、全体の場では、高学年への遠慮からか、小さくなっていることが多い。全体の中で自分の役割を果たし、会を運営することで、大きな場でも伸び伸びと活動できるようになると考えられる。

### ① 豆まき会について

一年間の悪鬼を追い出し、福を招き入れようという由来にあやかって、自分の生活課題を克服していこうとする意欲を持たせるのが、この会のねらいである。合わせて、協力しながら大豆を炒ることを経験させ、味わわせることによって、子供相互の親睦を一層深めていきたいと考えた。

### ② 計画と準備

複中の起案ということで、学級で話し合いを持った。ここで出された考えをもとにプログラムを作成した。具体的なことは係の子供と教師が話し合って進めることとし、決まったことを整理してプリント化し、複低複高両学級に連絡した。数日後、複式全体の集会が持たれ、説明と質問が行われた。豆まきの方法、鬼の意味、面の材料等について質問が出され、複中の代表者がこれに答えた。ここで各学級で準備しておくことや、後日説明することなど、課題の確認がされた。豆まきについては、食べ物を粗末に扱わないという考え方から、新聞紙を丸めて作った豆を投げることにした。



### ③ 実践

この日は、授業参観の日であった。2単位時間を集会活動として公開することは、異例であったが、保護者も一緒に楽しんでもらえる集会にしようと、それなりの演出も用意しておいた。また、各教科との総合的指導も考慮し、次のような内容を教科として位置づけた。

- ア 節分の由来と民話の発表 (国語科)
- イ 大豆の購入 (社会科・算数科)
- ウ 豆の入れ物・鬼の面作り (図画工作科)
- エ 大豆を炒ること (家庭科)

※複低は、まとめて生活科として捉えることができる。

### ④ 成果と考察

ねらいと照らし合わせて考えると、必ずしもうまくいったとはいえないが、豆を炒って食べることを初めて経験する子もおり、子供達は満足そうであった。複式中学年の子供達も自分たちの力で、複式全体の行事を運営できたことに満足し、これからの学校生活への自信を持ったことであろう。翌日、複高の子供から、次のような感想が届けられた。

「複中の人ば、あんな司会をやったりするのははじめてだから、最初(だいじょうぶかな。)と思っていたんだけど、あそこまでやってすごいなと思いました。それから、3年女子のお話がすごいなと思いました。それは、よくあんなお話をさがしたなと思ったからです。」

(文責 山田恵次, 上之園強, 福島靖之)

